

20120111_銀座農業政策塾_議事録

「銀座で初の農業生産法人設立と現状」

日時：2012年1月11日（水）19:00－21:00

場所：東京・銀座 銀座会議室

テーマ：「銀座で初の農業生産法人設立と現状」

「茨城農業改革」

発表者：田中淳夫氏（株式会社銀座ミツバチ代表取締役）

高安和夫氏（特定非営利活動法人銀座ミツバチプロジェクト理事長）

参加者：参加者 14人（発表者除く）

（会社員、銀行員、会社経営、農業系シンクタンク、公務員、NPO法人理事長、弁護士、行政書士、司法書士など）

薦谷栄一当塾世話人から開会挨拶、

塾長代行から銀座農業政策塾の趣旨、今回ミーティング趣旨

「銀座で初の農業生産法人設立と現状」

田中淳夫氏（株式会社銀座ミツバチ代表取締役）

銀座で初の農業生産法人「株式会社銀座ミツバチ」は、銀座のビルの屋上にて養蜂業を営みつつ、福島市新井地区の耕作放棄地を賃借し、農地の耕作も行っている。

銀座のビルの屋上にて採取したハチミツは、銀座の和菓子店や洋菓子店、バーなどに提供され、それぞれ銀座産ハチミツを使用した商品になっている。

また、飲食店とのコラボレーションにより、食と農のイベントも頻繁に開催されている。このことで、銀座の地域活性化につながれば幸いである。

株式会社銀座ミツバチは、2006年から銀座のビルの屋上にてミツバチを飼っている、特定非営利活動法人銀座ミツバチプロジェクトから生まれた農業生産法人である。

株式会社銀座ミツバチは、特定非営利活動法人銀座ミツバチプロジェクトに協力して、銀座のビルの屋上での養蜂作業、養蜂講座、屋上菜園管理、見学会、「ファームエイド銀座」を開催している。

ファームエイド銀座は、2008年から定期的で開催している。現在までに、各地の農産物が出品され、都市の住民と生産者とのつながりの機会を提供している。

また、佐渡の鬼太鼓や、宇和島の牛鬼、秋田のなまはげなども登場し、新庄村の餅つき、福島のソバ打ちなど様々な交流イベントも開催している。

ファームエイド銀座は、銀座の屋上の戦略的な活用も行っている。

たとえば、銀座にある白鶴の屋上にて、酒米を生産し、銀座で日本酒製造を行っている（試験免許による）。

また、化粧品会社は区の施設の屋上で障碍者の皆さんと一緒に屋上菜園作業に参加して頂いている。今後は、老健施設の屋上でもその入居者と一緒にハーブ生産をサポートして頂く予定である。

ファームエイド銀座は、都市の住民と生産者のつながりを深めるため、生産地へのツアーも行っている。現在までに、佐渡や、新庄村、また、福島県にも銀パチ×福島震災応援ツアー（被災地を応援する様々な企画を発信）が行われている。

田中氏は、「銀座のミツバチを基点に、農業、環境、教育、福祉、地域作り（コミュニティ作り）をミックスし、地方の住民とのコラボレーションを継続していく」とする。

そして、「このことが、農産物の付加価値を高め、生産者の収入を増やしてだけでなく、農業をみんなで社会的な意義あるものにしていくことにつながる」とする。

※ 銀座ファームエイド HP

<http://www.farmaidginza.com/>

「茨城農業改革」

高安和夫氏（特定非営利活動法人銀座ミツバチプロジェクト理事長）

高安氏は、特定非営利活動法人銀座ミツバチプロジェクトの理事長であり、茨城県にある農業生産法人「有限会社アグリクリエイト」の取締役（東京支社長）でもある。

高安氏は、平成 23 年 4 月に発表された「茨城県農業改革大綱」（2011－2015）に、茨城県農政審議会農業改革委員会委員として携わられた。

高安氏からは、「茨城県農業改革大綱」（2011－2015）につき、その沿革の説明が行われた。

- ・茨城農業は、かつては「つくれば売れる」という恵まれた環境（生産適地に加え、首都圏に近い）に安住した結果、平成 13 年には農業生産額が全国第 4 位に転落するなど、その地位を危うくする状況に追い込まれた。
- ・このため、平成 15 年度に「茨城農業改革大綱」を策定し、「消費者のベストパートナーとなる茨城農業の確立」を目指し、取り組んできた。
その結果、平成 20 年、21 年の農業生産額は全国第 2 位となることができた。
- ・情勢の変化に対応し、茨城農業を一層発展させるため「茨城県農業改革大綱」（2011－2015）を策定した。

「茨城県農業改革大綱」（2011－2015）のポイントとしては・・・。

- ・安全・安心な農産物の安定的な供給、エコ農業と食育による食と農への理解促進、組織的・戦略的な販売 PR などをおして、「いばらき」という「信頼ブランド」を構築する。

この取り組みの一つとして、JA だけでなく、農業者（農業生産法人）、県や市町村、加工・観光業者などの起業、NPO、研究機関、そして、消費者が参画して行う（「元気アップ作戦」、「食と農のプラットフォーム」）。また、この成果を随時発信していく。また、上記のような共同参画が6次産業化として結実し、「儲かる農業」となるとします。

この一環、そして、大震災の影響もあり、銀座に茨城県のアンテナショップ「黄門マルシェ ～いばらき農園～」が開設された。

また、飲食店を通じた情報発信を目的に、地元や首都圏の料理人の技術やアイデアを存分に発揮してもらうため、料理人を産地に招き、畑を散策して食材を探したり、料理を作って交流する「テストキッチン」の仕組みを活用する。

- ・上記に関連して、高安氏は「マルシェ・ジャポン」など売る場所をまず作り、さらにその後、いかに運用するシステムを作るか、人材を育成するかが大切とします。
- ・上記に関連して、高安氏の取り組みとして、エコ農業の推進のために、大子町、笠間市、稲敷市の農家の方々にはミツバチを飼っていただいているとします（ミツバチは生物多様性の指標となる）。
この取り組みは、エコ農業のモデルとなるとします（県からも補助金が支給される）。
- ・高安氏は、「農産物のブランド化のためには「環境保全型農業」として取り組んでいく必要がある」とまとめました。

※ 「茨城県農業改革大綱」（2011－2015）

<http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/noseisaku/3shiryou/taikou11-15/2shushihoukou.pdf>

※ 上記大綱の概要版

<http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/nourinjimu/kennan/kikaku/materials/taikou.pdf>

塾生から、農業環境政策素案のプレゼンテーション
蔦谷栄一当塾世話人から講評

以上